

# 史跡大山崎瓦窯跡 現地説明会 資料

## 5号窯・11号窯・12号窯の調査（史跡整備に伴う発掘調査）

大山崎町教育委員会

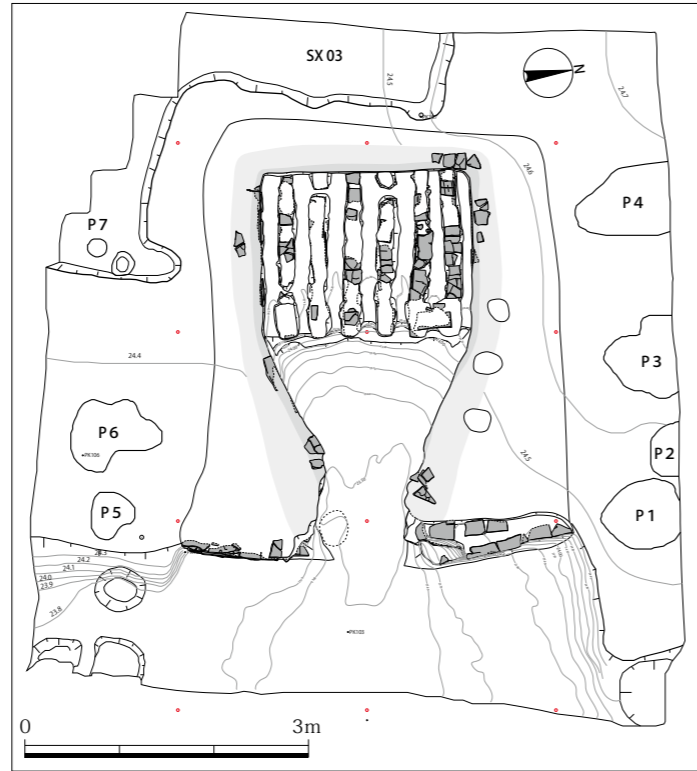
窯は、全長 3.9 m、幅 2.1 m、燃焼室長 2.1 m、隔壁厚 0.3 m、焼成室長 1.5 mを測ります。いずれも尺単位（約 30cm）で設計されています。この規模・規格は、大山崎瓦窯全体で共通しています。燃焼室と焼成室の高低差は 0.8 ～ 0.9 mを測ります。焼成室は改修によって、床面を高くしている可能性が考えられます。焼成室には、畝状の突起を 6 本つくり、<sup>ほのお</sup>焰の通り道を確保するため、床面に凹凸を形成しています。焼成室の上部（約 1 m）は、後世に削られて残っていません。瓦窯の側壁・奥壁は、瓦と粘土を交互に積み上げて構築しています。焚口の両側は、瓦積みで壁面が構築されています。これは、瓦窯の構築時に背後を埋め戻した土の崩落を防ぐためのものです。

瓦窯の周囲では、柱穴らしき遺構を検出しています。瓦窯を覆う建物の存在を示している可能性もありますが、さらに検討が必要です。

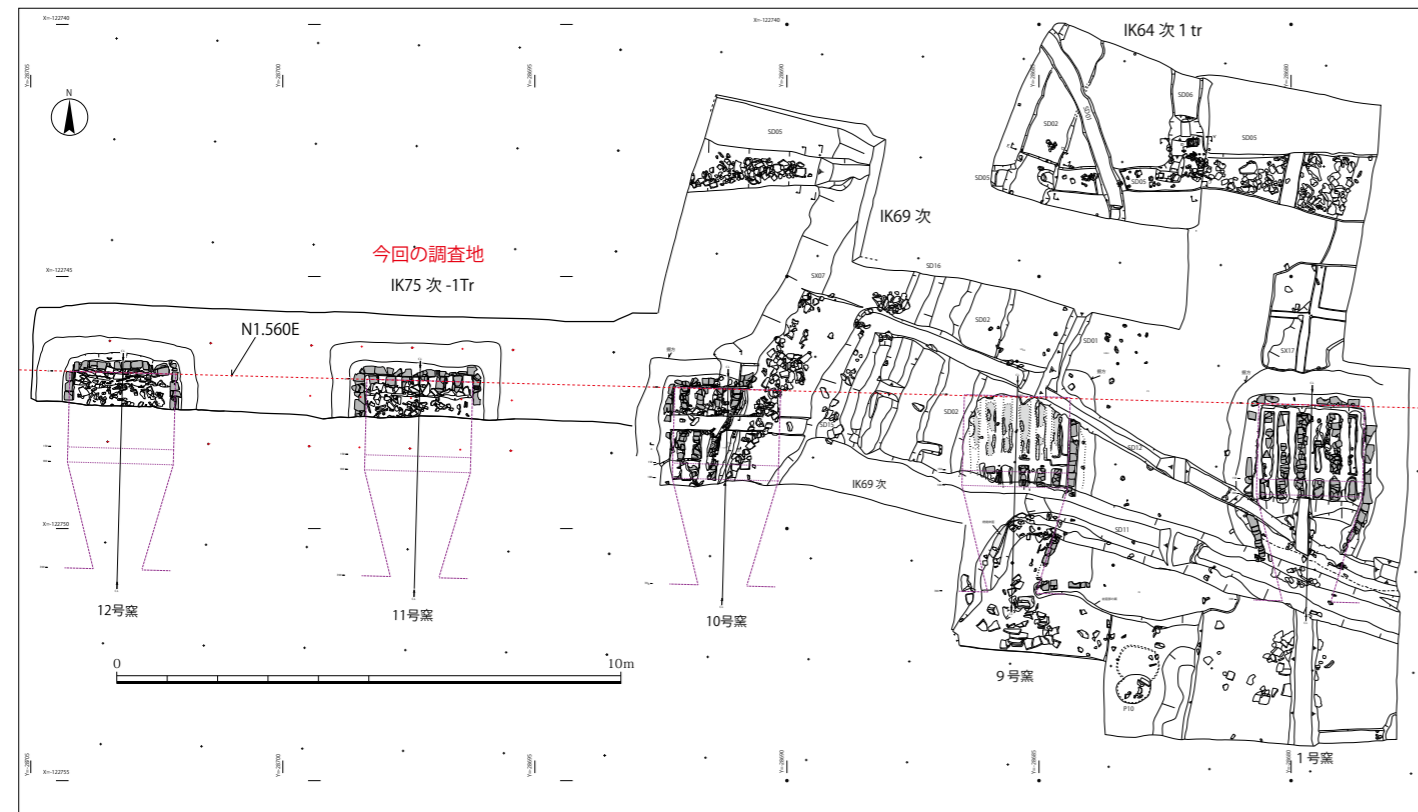
〔まとめ〕

今回の調査によって、史跡指定地における窯の配置の全容がほぼ解明されました。また、瓦窯の規模・規格・構造についても詳細を把握することができました。全体として、整然と窯が配置され、規模・規格が統一されているところに特徴がうかがえます。このあり方は、窯の数や操業回数を需要量から割り出す仕組みとして理解でき、造営日程が予め決められていたことも想像できます。大山崎瓦窯は、**大量の瓦を計画的に生産した平安京造営の実態を示す遺跡**といえます。

生涯学習課 文化芸術係  
大山崎町字円明寺小字夏目3  
電話 075-956-2101 (代表)



第 5 図 5号窯遺構平面図 (1:80)



第 6 図 南に開口する瓦窯群の遺構平面図 (1:150)

### 史跡大山崎瓦窯跡

指 定 平成 18 年 1 月 18 日

所 在 地 京都府乙訓郡大山崎町字大山崎

小字永福寺 29 番 1 他 5 筆、小字白味才 40 番 1 他 2 筆

指定面積 2,602.38 m<sup>2</sup>

### 今回の調査 (IK75 次調査)

調査期間 平成 28 年 12 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日

調査面積 第 1 調査区 29 m<sup>2</sup>、第 2 調査区 45 m<sup>2</sup>

### 調査概要

〔経過〕

史跡大山崎瓦窯跡は、平安京の瓦を生産した遺跡です。これまで、史跡指定地内で 8 基、北側隣接地で 2 基の瓦窯を検出し、大規模な瓦窯群であったことが判明しています。遷都当初は、西賀茂瓦窯（京都市左京区）と吉志部瓦窯（吹田市）が先行して操業しています。大山崎瓦窯はこれに次いで成立し、生産体制の中で主要な役割を担っていました。遺存状況が良好であり、平安京造営の実態をよく示す重要な遺跡として**国の史跡**に指定されています。大山崎町では、国庫補助事業として、史跡の保存整備事業を行っております。今回の調査は、史跡整備に必要な情報を得るために実施しています。

〔遺構の特徴〕

史跡指定地では、焚口を東に開く一群と南に開く一群に区分されます。また、北側隣接地においても東に開く一群が存在します。これらは、規則的に配置されています。また、排水溝や焚口前面の建物も同様の規格で配置されています。こうした特徴から、**大山崎瓦窯は、大規模な瓦窯群**として、当初から計画的に設置しようとしたことがうかがえます。

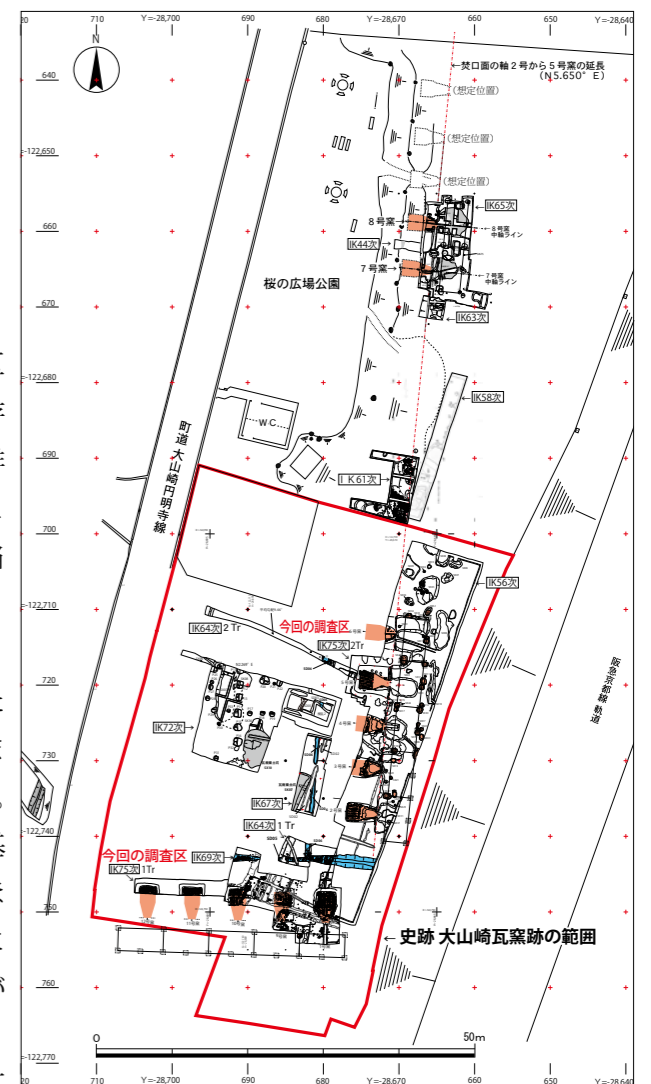
〔今回の調査成果〕

第 1 調査区では、10 号窯の西側で 2 基の瓦窯を検出いたしました（11 号窯・12 号窯）。各瓦窯の規模・規格もこれまで検出した他の瓦窯と同様で、もっとも遺存状況は良好です。この成果によって、東と南に開口する瓦窯群がそれぞれ 5 基単位で設置されていることが判明いたしました。両群は、ほぼ直角に（94°）に位置し、各瓦窯も約 6 m 間隔で規則的に配置されています。**計画性の高さ**と**正確な施工実態**がうかがえます。

第 2 調査区では、5 号窯の全面調査を実施しています。瓦



第 1 図 史跡大山崎瓦窯跡位置図



第 2 図 大山崎瓦窯跡全体平面図 (1:1,000)